徒然草

大事を思ひ立たん人は　―現代語訳―

仏道に入り、悟りを開くことを決心するような人は、心から離れず、気にかかることの、かねてからの望みを成し遂げることをしないで、そっくりそのまま捨て去るべきである。しばらく（待って）、このことが終わって（からにしよう）、同じことなら、あのことを処理して（からにしよう）、これこれのことについては、他人が嘲笑するだろう、将来、非難のないよう前もって処置しておいて（からにしよう）、長年の間こうして何事もなく過ごしてきたのだから、そのこと（の終わるの）を待とう、長くはかかるまい、あわて騒がないようにして（からにしよう）などと思うようでは、避けられないことばかりがますます重なって、それらの用事がなくなる際限もなく、（出家を）決心する日もあるはずがない。大体において、（世の中の）人を見ると、少しだけの（出家・入道の）志ある人々は、みんなこのような心積もりだけで一生が過ぎてしまうようである。

近所の火事などで逃げる人は、「しばらく（待ってから逃げよう）。」と言うだろうか（いや、言わない）。自分の身を助けようとすれば、恥をも顧みないで、財宝をも投げ捨てて逃げ去ることになる。（人の）命は人（の気持ち）を待ってくれるだろうか（いや、待ってはくれない）。死のやってくることは、水や火の災難が襲いかかるよりも速くて、逃げ去ることはできないものなのに、そのときになって、年老いている親、幼い子供、主君から受けた恩、他人の好意などを、捨てにくいといって捨てないだろうか（いや、捨てるに違いない）。